大阪経大論集・第五三巻第五号・二〇〇三年一月

『明暗』（フランス料理店の場面）と構想メモとしての五言絶句

――作者漱石の視点と小林・津田の形象――

田中邦夫

はじめに

『明暗』百五十五章から津田が小林に強請（ゆす）られた金を渡すフランス料理店の場面が始まる。百五十五章で津田は料理店で小林と落ち合い、百五十六章では小林は店内にいる「相当の扮装（みなり）をした婦人づれ」の客を話題とし、百五十七章から小林の津田に対する「説教」が始まる。

『明暗』執筆にあって漱石は、八月十四日（八十九章を書いた日）からは、午前中にその一章を書いた後、その日の午後に日課として七言律詩を書き始めることになる。[1] この日課は『明暗』の執筆がフランス料理店の場面に入った直後でも同様であった。ところが、『明暗』百五十七章を書いた十月二十一日、漱石は七言律詩「吾天を失いし時併せて愚を失い……」を創作した後、突然三首の五言絶句を連作し、その翌日にも、七言律詩を創作することなく五言絶句のみ三首連作し、それを最後に漢詩の創作を三週間にわたって中断することになる。この六首の五言絶句が、漱石の日課としての漢詩創作の最後に位置することを考えるならば、漱石は、この六首の五言絶句に、日課としての漢詩創作の中断を前提とした、今までの七言律詩創作とは異質な性格を付与していると考えられる。漱石は、日課としての漢詩創作を中断するにあたって、この六首の五言絶句にいかなる性格を持たせたのであろうか。本稿ではこのことを考えてみたい。

本稿の結論を先に示しておこう。私見によれば、漱石は、六首の絶句において、それ以前の律詩と同様に、漱石がこ

れから書かねばならない『明暗』の作中人物（主として小林と津田）の意識を、禅的視点に重ね合わせて詠うことによって、彼らの意識を客体化するための語り手と登場人物との距離を作り出していると考えられる。と同時にこれらの絶句には、『明暗』のフランス料理店での小林と津田の対話を描くための、いわば構想メモといえる性格を付与していると考えられるのである。

以下、本稿では、右に記した仮説を論証してみたい。私見によれば、本稿で取り上げる六首の五言絶句では禅の意識が詠われており、そのテーマは、①「愚」②「托鉢」③「悟りの機縁」に分類できる。「愚」と「托鉢」をテーマとした詩は、フランス料理店の場面における小林の形象と関係し、「悟りの機縁」をテーマとした詩はフランス料理店の場面における津田の形象と関係している。そこでまず①「愚」②「托鉢」をテーマとした詩と小林の形象との関連を検討し、ついで③「悟りの機縁」をテーマとする詩と津田の形象との関連を検討していきたい。

ところで、これらの絶句には多くの禅語が用いられ、その詩句には寓意が込められており、その寓意は難解である。そこで本稿では、煩雑となるが、まず本稿のテーマの理解に必要な限りにおいての詩句の語釈と、詩全体の大意（＝私見による解釈）を示し[2]、次いでこれらの詩句と『明暗』の関係を検討し、その上でこれらの五言絶句の性格を考えてみたい。

1

まず、小林の形象と関係する「愚」が詠われている二首から取り上げてみよう。

a

（十月二十一日）

元是一城主　元是れ一城主
焚城行広衢　城を焚きて　広衢を行く
行行長物尽　行き行きて　長物尽くるも
何処捨吾愚　何れの処にか　吾愚を捨てん

語釈――第一句の「一城主」には、「物欲」「欲心」が喩えられ（和田利男[3]・飯田利行氏[4]）、他人の容喙を許さない「我」（＝自分を守るための処世的意識）が、寓意されている。第二句の「城を焚いて」は、「物欲を断絶したこと」（和田氏）（＝「俗世の地位や名声を捨てたこと」）の寓意であり、「広衢を行く」は、「自由の天地に躍り出たこと」（和田氏）、第三句の「長物」（＝「余分なもの」）は、現世における地位や金（への執着心）の寓意である。第四句の

「愚」は現世への執着を捨て「無」に徹する禅的な生き方をいう。ここでは、社会的地位や金を捨てたとしても、その執着心を捨てることは容易でないことが詠われているといえよう。

大意（解釈）――わたしはもと現世での利害得失に執着する意識（＝我執）を持っていた。しかし私はその現世への執着を捨て、自由な世界（禅的真実）に生きてきた。その過程でわたしは現世的幸福や執着心を捨ててしまった。禅的理想の生き方は「愚」へのこだわりをも捨て、無に徹することによって得られるのであるが、わたしはその生き方に徹することができない。どうすれば「愚」へのこだわりを捨て「無」に徹することが出来るのだろうか。――

この詩の表層では、右のような意味内容が表現されていると考えられる。問題は、漱石が『明暗』百五十五章から始まるフランス料理店のクライマックスにさしかかった段階でこのような禅的な意味を持つ詩を創作している理由であろう。私見によれば、この五言絶句は、現在執筆しているフランス料理店の場面における小林の形象（その心のありよう）と深い関係がある。以下、この詩と『明暗』とのかかわりを考えていこう。

「元是れ一城主　城を焚きて広衢を行く」について

百五十七章（この詩を創作した当日に執筆）の初めで、小林は酒の力を借りて「僕に時を与へよだ、僕に金を与へよだ。しかる後、僕が何んな人間になつて君等の前に出現するかを見よだ」という。この小林の言葉は、彼の意識のうちに、現実社会の秩序に順応しさえすれば、現在のような惨めな生活を送らずにすむはずだ、自分にはそれだけの能力があるという気持ちが存在していることを示している。このことはかつての小林が現実生活での成功への希望を人並みに持っていたことを示している。小林の持っていたこのような現実生活への執着が、この詩句では、「一城主」という言葉に寓意されていると考えられる。

一方、現在の小林は、富裕者層の金が生み出す「余裕」（＝贅沢）を否定し、弱者の味方を標榜する社会主義者的風貌を持つ男となっている。しかし百五十八章（この詩を創作した翌日に執筆）で、「憚りながら此所迄来るには相当の修業が要るんだからね。いかに痴鈍な僕と雖も、現在の自分に対しては是で血の代を払つてるんだ」と語っているように、彼は「修業」によって現在の自分の生き方を形成したのである（この小林の発言は、彼の社会主義的意識が禅的意識と重ねられていることを示している。[5] 小林はかつて持っていた現実生活への執着心を「捨て」、物質的な

執着心から離れた生き方（「痴鈍」＝愚）を理想とするようになっており、津田に対して「贅沢をいふ余地があるから」君の方が窮屈で、不自由で、束縛を感じるのだと、「余裕」と無縁な生活に生きる自分の優位性を誇るのである。小林のこのような意識の過程が、「城を焚きて広衢を行く」という句に寓意されていると考えられる。

「行き行きて長物尽くるも　何れの処にか吾が愚を捨てん」について

百五十七章の小林は、金が生み出す「余裕」（＝贅沢）を否定し、自分の生活が世俗における利害への執着心と無縁であり、それゆえに、現在の津田よりも「自由」な境地にあると主張する。しかし彼は、藤井の雑誌編集の手伝いでは、生活できず、金に執着し、富裕者から金を強請ることも平気でする無頼漢として生きている。また彼は、現実の社会では、自分が敗残者に過ぎないことを自覚し、津田から餞別を貰って、涙を流す存在でもある。また彼は自分の存在が無視されることに耐えられず、そのため自分の生き方が、俗世間から「軽蔑に値」することを「事実」として認めながらも、しかし第三者の「軽蔑」には耐えられず、自分に向けられる「軽蔑」に対しては「軽蔑」で対抗し、その相手に対して「復讐」せずにはおかない自我主義の男でもある。彼は自分の「痴鈍」（＝愚）の価値を津田に認めさせずにはおれないのである。以上みてきたような小林の意識のありようは、彼の現実への強い執着心を示しているのである。そして、このことは小林の意識が、物事への執着を捨て去り、「天」（禅的「自然」）に従って生きるという「愚」の生き方から離れてしまっていることを示している。

漱石は、『明暗』のフランス料理店の場面で、小林の屈折した意識――禅的な「愚」に似た意識を理想としながらも、現実に執着し、「愚」に徹する（＝愚を捨てる）ことのできない小林の意識――に焦点を当てて描くことになる。禅的立場からするならば、小林の現実社会への執着は、否定されるものである。しかし社会主義的観点からするならば、その小林の現実への執着は、金が支配する社会との戦いであり、小林の屈折した意識は、金が支配する現実への恭順を拒否したために生じたものである。このような小林の屈折した意識に、漱石は同情を示さずにはいられなかったと思われる。「行き行きて長物尽くるも　何れの処にか吾が愚を捨てん」では、小林が現実への執着心を捨てることができていないことを、その表層では批判し、しかし深層では同情をもって詠っていると考えられる。

b

（十月二十二日）

元是錦衣子　元是れ　錦衣の子
売衣又売珠　衣を売り　又珠（たま）を売る
長身無估客　長身　估客無く
赤裸裸中愚　赤裸　裸中の愚

この詩は、「元是一城主」と類似している。異なるのは、「元是一城主」では「長物」（余分なもの）に位置するものが、この詩では「衣珠」として詠われていること、「元是一城主」では「吾」の意識に焦点が当てられているのに対し、この詩では「估客」[6]（＝買い手＝他者）との関係に焦点が当てられている点であろう。前詩とのこの違いに、この詩の眼目があると考えられる。

語釈――「錦衣」は、前詩の「城主」と同じく、現実への執着心（「我」＝現世での欲望）の寓意である。「衣珠」は、一海氏の語釈[7]に示されているように、仏性（＝真の自分）と解釈すべき語句である。「長身」は、長物のような「よけいな身体」（吉川注[8]）の意であろう。したがって「長身估客無く」には、主観的には価値があると考えている自分の生き方（愚）には、大切なものが失われており、そのため世間の誰からも理解されないことの寓意があると考えられる。「愚」は現世への執着心を捨てた「無」に徹する生き方を意味するが、「長物」との関係から、「赤裸裸中の愚」という句には「估客」（他者）の評価――現実には役に立たないという評価――が込められていると考えられる。

大意（解釈）――元来は世俗の成功を願望する意識（我執）の持ち主であったが、現世での幸福や成功への意識を捨てて「愚」に徹して生きてきた。しかし同時に、（世俗とのかかわりを断ち切れず、）自分の大切な人間的要素をも捨てることになってしまった。そのため現世での成功や執着の意識を捨てて得た「愚」（主観的には「天」に従った生き方のつもりが、実際には我執に彩られてしまっている「愚」）は、俗世の誰からも評価されない。自分のうちにある真の「愚」（＝仏性）に徹することは至難のことである。――

次に、この詩と『明暗』とのかかわりを考えてみよう。

「元是れ錦衣の子　衣を売り又珠を売る」について。

「元是れ錦衣の子」は、かつての小林の現世での成功への願望を詠ったものといえよう。「衣珠」が仏性（＝真の自分）を意味することに留意するならば、「衣を売り又珠を売る」には漱石の小林に対する次のような思いが重ねられ

ていると考えられる。――《小林は、現実での成功を目指す生き方を否定し、社会的弱者の立場に立ち、吉川や岡本に代表される富裕者層に反抗してきたが、しかし彼は人の弱みを利用して金を強請ることも辞さない無頼漢としてしか生きることが出来ない。このような小林のありようは、「衣を売り又珠を売る」（＝人間としてのあるべき意識を失ってしまっている）ことになっているのだ》――

「長身估客無く　赤裸裸中の愚」について。

百五十八章（この詩を創作した翌日に執筆）では、地位や財産の無い小林が、いくら正論を吐いても、津田から無視される様子が描かれる。漱石はこのような小林の姿を「長身　估客無く」と詠い、「赤裸裸中の愚」では、現実での成功への意識を断ち切った小林の生き方が、小林の目指す生き方から大きく外れてしまっていること、また彼の意識にあっては、自分の存在が他人からは無視される社会的敗残者でしかないことの自覚に苦しんでいることを詠っていると考えられる。私見によれば、これらの詩には、漱石の次のような小林への思いが込められていると考えられる。――《金が支配する現実を拒否すれば、金によって復讐され、誰でもが小林のような敗残者の意識を持たざるをえないであろう。禅的な境地を得るために捨てなければならない、小林の現実への係わりのこのような意識（＝現実への執着心）は、果たしてどうすれば捨てることが出来るのであろうか……[9]》――

＊　＊　＊

右に「愚」をテーマとしている二つの絶句を取り上げた。「元是一城主」では、禅的生き方の理想である「愚」をも捨てることによって得られる「大愚」の世界への到達の難しさに、富裕者が支配する現実への恭順とその出世への願望を拒否しながらも、しかしその現実社会に生きるために必要な金に執着せざるを得ない小林の屈折した意識が重ねあわされていると考えられる。「元是錦衣子」では、小林のこのような屈折した意識が他者との関係で詠われているといえよう。

もちろんこの詩で詠う「愚」と『明暗』の社会主義的風貌を持つ小林の意識との間には大きな距離がある。たとえば、この詩では、作者漱石によって、小林の生き方――「愚」に生きることができない生き方――が批判的に詠われているのに対し、『明暗』の小林には、自己批判の意識はない。両者の間に存在する距離は大きい。この距離は、作者漱石の小林への複雑な批判的思いを詩の中に封印し、『明暗』では小林に対する同情や批判的言辞を加えること

なく、小林の言動をありのままに客体化して描き出すという手法を貫徹させる機能として働いているのである（距離の問題については後述）。

一方漱石は、これらの絶句を書いた後、『明暗』におけるフランス料理店の場面の展開のなかで、小林の屈折した意識――禅的な「愚」に似た「痴鈍」の意識を理想としながらも、しかし現実に執着し、「愚」に徹する（＝愚を捨てる）ことのできない小林の意識――に焦点を当てて描くことになる。このことに留意するならば、「愚」をテーマにしたこの二首の五言絶句は、小林の「痴鈍」のありようを描き出すための構想メモとして機能していると言えるのである。

2

次に小林の形象と関係する、「托鉢」（＝乞食）をテーマとしている二つの詩を取り上げていこう。

a

（十月二十二日）

元是貧家子　元是れ　貧家の子
相憐富貴門　相憐れむ　富貴の門
一朝空腹満　一朝　空腹満つれば
忽死報君恩　忽ち死して　君恩に報ゆ

この詩は同日に作られた別の絶句（「元是東家子」）と共に、禅僧の托鉢の意識をテーマとしていると考えられる。[10]

語釈――第一・二句の「貧家の子」が「富貴の門」（＝富貴の人）を「相憐れむ」という関係（一海氏注）には、禅僧が世俗に生きる富貴の人（＝「余裕」が生み出す心）を「憐れむ」という関係が重ねられている。第三句では、世俗の富貴の人から施しを受けて「空腹」を満たす禅僧の姿が描かれ、第四句では、その世俗の人の施し物への感謝の念――禅僧は世俗の人の喜捨によって生活を維持し、その仏恩によって修行三昧の生活を送り、悟りを開き、俗世の人の喜捨の恩に報いるという禅僧の托鉢の意識――が描かれていると考えられる。第四句の「死」は禅でいう「大死一番」（この場面では、仏道修行によって得る悟りの世界にすべてを捧げる＝私心を捨てて真面目（仏心）に帰るという意）であろう。「君恩」についての多くの注釈は、「主人の恩義」（吉川・一海氏注）、「天子の鴻恩」（飯田氏注）などとする。しかし、この場合の「君」は小村定吉氏の注が示すように「富貴の門（人）」を指し、「君恩」[11]の内実は、托鉢の真髄を教えた仏、またそれを伝えた尊者たちへの感謝の念（すなわち禅僧が世俗の人から喜捨を受けて生活を

維持するという仏恩）と解すべきであろう。

大意（解釈）――禅僧である私は、現世での財や物欲とは無縁な存在であり、それゆえに心は太平である。世俗に生きる富裕の人々は、財に執着しており、そのあくせくした富裕者の心をわたしは憐れむのである。禅僧は托鉢によって世俗の人々の施しを受けて空腹を満たすのであるが、托鉢によって衣食が足りれば直ちに修行三昧の生活に戻り、托鉢の道を伝えた仏や尊者たちに感謝し、施しをしてくれた世俗の人の仏恩に（彼らを仏の道に導くことで）報いるのである。――

次に、この詩とフランス料理店の場面との重なりをみていこう。

百六十章（この詩を創作した二日後に執筆）の小林は、津田の心が「飢え」の状態にあることを指摘し、その理由を「余裕に祟られている所以だね」と解説した後、「貧賤が富貴に向つて復讐をやつてる因果応報の理だね」と言う。この「貧賤」と「富貴」という言葉は、この詩の「貧家の子」と「富貴の門」との関係に、小林と津田との関係が重なっていることを示している。また、『明暗』百六十六章の小林は、津田が与えた金を「余裕が空間に吹き散らして呉れる浄財だ。拾つたものが功徳を受ければ受ける程余裕は喜こぶ丈なんだ」と語るが、津田が小林に与えた金を「浄財」と表現し、その金で青年画家原や小林が「功徳を受ける」という表現には、この詩が詠っている禅僧の、世俗の人から生活の資を受ける托鉢の意識が、津田から金を与えられる小林の意識に重ねられていることを示している。

ところでこの詩では、貧家の子（禅僧）が富貴の人（世俗の人）を「憐れむ」関係にあるが、『明暗』のフランス料理店の場面における小林と津田の関係は、表面的には「軽蔑」しあう関係にあり、両者には大きな違いがある。しかし小林の「軽蔑」の根底には、小林の「痴鈍」の立場からの津田への憐れみがあり、この点でも両者は重なっていると考えられる。

次に、この詩の第三・四句（「一朝空腹満つれば　忽ち死して君恩に報ゆ」）で詠われている禅僧の報恩の意識と、『明暗』における小林の意識との関係を考えてみよう。

すでに記したように、この詩の第三・四句では、禅僧の托鉢に施しをしてくれた世俗の人に対して、その仏恩に報いようとする（感謝する）禅僧の意識が詠われている。一方、百六十一章の小林は、津田から金を受け取ると、「急劇な変化」を示し、「僕は余裕の前に頭を下げるよ。……礼を云ふよ。感謝するよ」と「突然ぽた〳〵と涙を落し始

め」る。その姿には詩のなかで禅僧が世俗の富裕者から施し物を受ける姿が重ね合わされているといえよう。また詩の「死して君恩に報ゆ」も、小林が今までの津田への説教が「君が是から夫らしくするかしないかが問題なんだ」という忠告にあったことを打ち明けることと重なる。右に見てきたように、この五言絶句の、禅僧の托鉢の意識には、これから漱石がフランス料理店の場面で描こうとする小林の意識が重ねられているのである。

もちろん、この詩で詠われている禅僧の意識と『明暗』の小林の意識とには大きな距離が存在するが、この距離の問題については、後に考えることにして、次いで同日に創作している、もう一つの托鉢をテーマとした詩を見ていこう。

b

元是東家子　元是れ　東家の子
西隣乞食帰　西隣　乞食して帰る
帰来何所見　帰来　何の見る所ぞ
旧宅雨霏霏　旧宅　雨霏霏たり

この詩は托鉢後の、帰宅して再び禅定に入る禅僧の心境を詠ったものであろう。[12]

語釈――「東家」・「西隣」は、『碧巌録』など禅書に見える「東家に人死すれば、西家の人哀を助く」（相手の気持ちを理解し助けてやるの意）〈『碧巌録全提唱』、山田無文氏解説[13]〉という諺を踏まえたものであろう。詩の前半では、「東家の子」に禅僧を、「西隣」（「西家の人」）に世俗の人を重ね、現世に生きる経済的手立てを持たない禅僧が、世俗の人から施しを受けて生活を維持するという関係を表現している。第四句の「旧宅」とは、「旧路」「旧時」が含意する「本来の面目」につながる、「人の本来の居るべき場所」の意味と考えられる。（「寒山詩」にみえる「寒山に一宅あり　宅中　欄隔無し　六門　左右に通じ　堂中天碧を見る……」の「一宅」、あるいは「わが家は本より住するは天台にあり……」の「わが家」、また良寛詩の「家は白雲の陲（ほとり）に在り」の「家」、などの意味する、人間の本来の居場所（俗世間から隔絶した境地）を含意していると考えられる。）「雨霏霏たり」も禅林で用いられる意味を踏まえていると考えられる。すなわち『槐安国語』巻一にみえる、「霏霏たる梅雨　危層に洒（そそ）ぎ、五月の山房　氷よりも冷（ひや）かなり」の「霏霏たる梅雨」が意味する、絶対境の世界を踏まえた表現であろう。以上のことから、第四句は托鉢が終った後の禅僧の帰るべき境地（禅定の世界）を詠ったものと考えられる。

大意（解釈）――禅僧は世俗の人々に食を乞うて（托鉢して）生活を維持している。しかし托鉢から帰れば、そこは世俗から切り離された禅僧の居るべき修行の場所であり、禅僧はそこで禅定の世界に生きるのである。――

次に、この詩と『明暗』のフランス料理店の場面との係わりを考えてみよう。

右に見たように、この詩では、世俗の中で托鉢して飢えを凌いだ後、再び修行三昧の生活に戻る禅僧の意識――托鉢は生命を維持する施し物を受けるためであり、施し物それ自体には全く執着しない意識――が詠われている。一方、小林は経済的困窮から、朝鮮へ落ちようとしており、津田から着古した外套をもらい、その旅費を捻出するために入院中の津田から金を強請り、今その金の受け取ろうとしているところであった。しかし小林は、その金に執着せず、自分よりも貧窮している青年画家に必要な金をその中から受け取らせようとする。このような小林の態度には、（クロポトキンの「相互扶助論」の投影も感じられるが）この詩で詠う禅僧の托鉢に対する態度――禅僧は、托鉢し飢えをしのぐが、しかしその施し物に執着しない態度――が投影していると考えられる。漱石はこのような小林の姿を描き出すことを念頭において、この詩で、禅僧の托鉢の意識を詠っているのである。このことに留意するならば、この詩においてもまた、これから漱石が描くことになる『明暗』百六十五・百六十六章の、小林のイメージが重ねあわされていることが理解できるのである

以上のことを考えるならば、「托鉢」をテーマとした二首の五言絶句も、『明暗』百六十五・百六十六章における小林の造型のための構想メモといえる性格を持っているといえるのである。

c

右に、「托鉢」がテーマとなっている二つの詩を見てきたが、これらの詩で問題となるのは、この詩の表層で詠われている禅僧の托鉢の意識と、その意識に重ねられている、津田から金を貰う小林の意識との距離の大きさであろう。この距離の大きさは何を意味するのであろうか。以下、この点を考えていこう。

フランス料理店で、小林は津田から金を受け取ることになるが、しかし小林の津田から金を引き出すそのやり方は、強請である。百十八章から百二十二章の小林は、病室での津田との対話のなかで、吉川と岡本の関係や、彼らの財産の額を問題とし、岡本から金を強請ることを口にし、さらには、吉川夫人がすぐこの場に来るという情報を津田に提

供した後、わざとその場に居続け、小林を早く追い払う必要を感じている津田から金をやるという言質を取る。こうして、百五十一章から始まるこのフランス料理店の場面で、小林は、金を受け取ることになる。またフランス料理店の場面でも、小林は金を貰う立場にあるにもかかわらず、自分に向けられる津田の軽蔑に対しては、津田への「軽蔑」や「復讐」という言葉で応ずる。小林の津田への「軽蔑」や「復讐」の内実は、彼の「痴鈍」の立場からする、津田への「憐れみ」を内実とするが、しかし小林の津田への憐れみは、津田が自分に「軽蔑」の意識を向ける以上、彼の屈折した自我主義に彩られた「軽蔑」「復讐」という言葉を通してしか現われない。

作者漱石は、このような屈折した意識に生きる小林の自我主義に彩られた無頼漢としての態度を、あるべき人間の態度からは、大きくはずれていることを批判せずにはいられなかったと考えられる。このことを考えると、漱石が漢詩に詠んだ禅僧の意識に、『明暗』の語り手の意識を同化させていることには、作者漱石が批判を加えずにはおれない小林の醜悪な自我意識を、批判的言辞を加えることなく、客体化して描き出すことを可能にするための作業という意味を持っていたと考えられるのである。禅僧の立場とは、現実に生起する事柄、そこに生きる人間のありようをすべて仏心（＝無）から生じたものであると認識し、現実（世俗）に生きるためには人間が持つことになる利害心（＝我執）を、「憐れみ」（＝「微笑」）を持って見つめ、その彼らの意識を本来のあるべき状態へと導く存在である。『明暗』の作者漱石は、このような禅僧の境地に身をおくことで、小林に対して、批判的言辞を加えることなく、その醜悪な意識世界を客体化して描き出すことが出来ているのである。

以上のことを考えるならば、作者漱石は、禅僧の姿を、小林の背後に置くことによって、――あるべき禅的な人間の理想的姿から、小林の意識とその言動を透視することによって、――自分の理想である禅僧の態度と小林の態度との違いを確認し、『明暗』の語り手と小林との距離を作り出していると考えられる。そしてこの「距離」の認識によって、作者漱石は、小林に批判的言辞を加えることなく、その醜悪な要素をも客体化して描き出すことが出来ているのである。このことを考えるならば、これらの絶句は、これまで連作してきた七言律詩と同様、『明暗』の小林を客体化して描き出すための作者漱石の視点の強化という役割をも担っているといえるのである。

3

次に、津田の形象と関係する「悟りの機縁」を詠った二首を取り上げていこう。

a

（十月二十一日）

元是喪家狗　元是れ　喪家の狗
徘徊在草原　徘徊して　草原に在り
童児誤打殺　童児　誤って打殺す
何日入吾門　何れの日にか　吾が門に入らん

語釈――「喪家の狗」とは、「心の帰着するところがないことにたとえた」（中村宏氏[14]）もので、本来の自分（＝仏性）を失っている心の寓意であろう。「徘徊」は、『碧巌録』「洞山無寒暑」で「忍俊たる韓獹、空しく階に上る」（月影（絶対相）を摑もうとする「韓獹」〈＝韓家の犬〉がうろつくありさま）と関係があろう。『明暗』百六十五章では、未知の少年の手紙を読んだ津田の内面が、「（同情心は起こすが）彼は其所（そこ）で留まつた。さうして低徊した」と描写されている。「徘徊」と「低徊」は同義である。詩の「徘徊」と『明暗』の「低徊」との重なりは、この詩のイメージと未知の少年の手紙を読んだ津田の内面とが繋がっていることを示している。「草原」は禅語「草裏」の言い換えであろう。『碧巌録』第四則「徳山到潙山」の「頌」に「孤峰頂上　草裏に坐す」とみえ「草裏」とは、「偏位の真っ只中」（＝俗世）を意味する。また禅語「草裏の漢」は「悟りを開くことができない人」をいう。禅語「打殺」の「殺」は「捨」と同義で、「内も外も心も身も、一切すべて捨施すること……主体も客体も忘じ去った働きを示すもの」（「臨済録」（『禅の語録十』の秋月龍珉氏注、「伝心法要」（『禅の語録』8の入矢義高氏注）である。また禅語「一棒打殺」は、「師家が学人の悪見妄想を直ちに取り除くこと」を意味する。「童児」には、様々なイメージ（たとえば、良寛詩の子供のイメージなど）が重ねられていると考えられるが、「徘徊」と「低徊」とのつながりで考えるならば、百六十四章で、津田が読まされる、小林に宛てた手紙の書き手、（未知の少年）が重ねあわされていると考えられる。「誤って」とは、少年の手紙は小林に当てたもので、津田に訴えようとしたものではないが、それを津田が読んで心を動かされたことを意味していると考えられる。「吾が門」とは、現時点での漱石が到達した禅的思惟における「悟りの境地」を指すと考えられる。

大意（解釈）――彼は自分の心の帰る場所を失った存在

である。彼は心の帰る場所を求めながら、世俗の中で生きている。ある時少年の無垢な心（との接触）が、彼の我執を打ち砕き、自分の本当の心を目覚めさせる機縁となった。（しかし彼の我執は強く、本当の心に帰ることは容易ではない。）何時になったら彼はわたしの立場である「悟り」の境地に入ることが出来るのであろうか。――

次に、この詩と『明暗』との関係をみていこう。

「元是れ喪家の狗　徘徊して草原にあり」について。

『明暗』では、津田は様々な場面で「犬」に喩えられている。百八十四章では、津田は旅館の下女の年齢・原籍・故郷等を自分の鼻で当ててみせてやると冗談をいい、下女はあなたは奥様（清子）の部屋を嗅ぎ当てる方だと言い返す。また百八十七章では津田は清子に「成程貴方は天眼通でなくつて天鼻通ね。実際に能く利くのね」と言われて「退避」ぐ。既に指摘したように、これらの場面で津田が犬に喩えられていることには、『碧巌録』「洞山無寒暑」において、「無寒暑」（絶対相）を求めながら、それを悟ることのできない僧が「韓獹」（＝韓家の犬）に喩えられていることを踏まえていると考えられる。[15] このことから、この詩で詠う「喪家の狗」には、津田の本来の自分を見失っている心が重ねられていると考えられる。語釈で示したように、「徘徊して草原にあり」では、心の帰るべき場所を求めながらも、悟りを開くことが出来ずに世俗に生きる人を詠っている。このことに留意するならば、この句には、津田が本当の自分を求めて、俗世のなかでうろつくさま（世俗での利害を第一に考えながらも、清子が自分から離れた理由を知らずにはおれない心の飢え）の寓意があると考えられる。

「童児誤って打殺す　何れの日にか吾が門に入らん」について。

語釈で示したように、この「童児」は、『明暗』百六十五章（この詩を創作した八日後に執筆）の津田が読んだ手紙の書き手である未知の少年と重なっていると考えられる。したがって、この句の前半は、津田が読んだ未知の少年の手紙によって、何時もの我執が退き、同情心（彼のうちにある真のこころ＝人間性）が呼び起こされること（百六十五章）を寓意していると考えられる。しかしながら、この時の津田について、作者は津田のうちに「あゝ是も人間だといふ心持」が引き起こされはするが、「それより先へは一歩も進まなかつた」と描いている。これは、未知の少年の手紙を読んで、彼のうちでは我執とは異なる真の心（＝「本来の面目」に繋がる彼本来の人間的意識＝第二の心）

が浮かび上がっているが、しかし彼の日常を支配する第一の心（我執）がその第二の心（真の心）を抑え付けてしまっていることを作者が認識しているからである。そのため「彼は其所で留まつた。さうして低徊した。けれどもそれより先へは一歩も進まなかつた」と語り手は描写することになる。「吾が門」とは『明暗』を書いている時点での漱石（＝『明暗』の語り手の禅的立場）の視点を象徴しているといえよう。従ってこの句では、津田の心に不遇の少年に対する同情心は引き起こされるものの、しかし津田の心がまだ己の我執を克服できる段階とは程遠いことを詠っているといえよう。

以上のことからこの詩は漱石が『明暗』百六十四・百六十五章で書くことになるフランス料理店で小林から未知の少年の手紙を読まされ、津田の心に「同情心」が引き起こされるが、しかしこの段階にあっても津田の心は依然として我執によって支配されており、彼が己の我執を捨てることは容易ではないことを、詩の中で先取りして詠っていると考えられる。漱石はこの詩を詠った八日後に、津田が未知の少年の手紙を読んで同情心を覚える場面を描き出している。このことを考えるならば、この詩は明らかに漱石のフランス料理店の構想メモという性格を持っているのである。

b

（十月二十二日）

元是太平子　元是れ　太平の子
寧居忘乱離　寧居　乱離を忘る
忽然兵燹起　忽然として　兵燹　起こり
一死始医飢　一死　始めて飢えを医やす

語釈――諸注はこの詩を現実の戦争との関係で解釈している。しかし私見によれば、この詩は、禅的な視点による心の葛藤をテーマとしていると考えられる。「太平」「寧居」とは、心に葛藤がなく、平穏な生活を送っていること、「乱離」「兵燹」とは、心に生じる激しい葛藤の寓意であろう。「一死」とは、「大死一番」と同義で、我執（＝世俗に生きるための計算高い意識）を捨て、人間本来の意識（＝仏心・本来の面目・自然）に帰る（無の状態に徹する）ことを意味する。

大意（解釈）――彼は心に苦しみのない人間であった。その生活は平穏であり、精神的葛藤とは無縁であった。（しかし世俗に生きる人には誰にでも心に飢えがあり、切っ掛けがあれば）、急に心に激しい葛藤が生ずることになる。人は我執を捨てて無に帰することによって、はじめて

心の飢えを癒すことができるのだ。――

この詩と『明暗』との関係をみていこう。

「元是れ太平の子　寧居乱離を忘る」について。

「太平」という言葉は、この詩を書く前日に執筆した『明暗』百五十七章で、小林が津田に語る言葉――（津田の社会的位置が彼の贅沢や自由や幸福を作り出しているが、しかし）「何方（どっち）が太平で何方が動揺してゐるか」（分からない）と語る言葉――と関係があろう。津田の心の「太平」は、贅沢による「余裕」によって生み出されたものであり、その「余裕」は津田の「利害の論理（ロジック）に抜目のない機敏さ」（＝我執）によって保証されている（百三十四章）。彼の「利害の論理（ロジック）に抜目のない機敏さ」はきわめて強く、彼の心のうちに起こる葛藤は、いつもその機敏さ（＝計算ずくで行動する世俗の意識＝彼の第一の意識）が、彼のうちにある「本来の面目」に繋がる彼の本当の意識（＝第二の意識）を直ちに制御してしまうために、良心の呵責として立ち現われることはない。たとえば、百七十三章の語り手は、津田の心のうちを、「彼は其両面（第一の意識と第二の意識）の対照に気が付いてゐなかつた。だから自己の矛盾を苦にする必要はなかつた」と描き出している。「元是れ太平の子」とは、『明暗』に登場する津田が己の心の葛藤を良心の呵責として意識することのない状態を表現していると考えられる。

彼は吉川夫人の教育によって、己の意識にある第二の意識（「本来の面目」に繋がる、彼本来の人間的意識）を心の奥深くに押し込め、世俗に生きる知恵（計算高い意識＝我執＝第一の意識）を、自分の生き方の信条とするようになる。しかし彼の意識にあっては、第一の意識が、第二の意識を押さえつけているに過ぎない。このような現在の津田の意識の状態を「寧居　乱離を忘る」と詠っていると考えられる。

「忽然として兵燹起こり　一死始めて飢えを医やす」について。

『明暗』との関係で考えるならば、「兵燹」とは、百六十五章（この詩を創作した八日後に執筆）で小林が指摘する「良心の闘ひ」が、津田のうちに生ずることを指すと考えられる。津田は己の意識の奥底に彼本来の意識を押し込め、世俗に生きる計算高い第一の意識を彼の生き方の信条としている。しかし、彼の意識の奥底では、第二の意識が不断に第一の意識に反逆しており、それは津田にあっては、清子が突然自分を見捨て関と結婚した理由を知らずにはおれないことと結びついている。このような津田の心のうち

にある要素（第二の意識の第一の意識に対する反逆）は心の「飢え」であり、それは何かのきっかけがあれば、現在の津田を支配している意識（第一の世俗意識）を激変させる要素として存在している。百六十章の小林は津田に対して、「今既に腹の中で戦ひつゝあるんだ。それがもう少しすると実際の行為になつて外へ出る丈なんだ。」と語る。また百六十五章の小林は、不幸な少年の手紙を読んで同情心を起こした津田に対して、「同情心が起るといふのは詰り金が遣りたいといふ意味なんだから。それでゐて実際は金が遣りたくないんだから、其所（そこ）に良心の闘ひから来る不安が起るんだ。僕の目的はそれでもう充分達せられてゐるんだ」と語る。第三句は、このような津田の意識内部における葛藤の顕在化――津田のうちにある第二の心が第一の心に反逆し、津田の心に激しい葛藤を引き起こすことになるという、これから書くことになるであろう津田の将来――を詠っていると考えられる。

「一死始めて飢えを医やす」とは、このような津田の心の飢えは、彼が我執（＝世俗に生きるための計算高い意識）を捨て、彼本来の心に帰ったときにはじめて消滅するのだという作者漱石の思いが込められているといえよう。『明暗』の展開で云えば、この句には、作者漱石が、フランス料理店の場面で、小林の意見を無視する津田に対しての小林の言葉――「事実其物に戒飭される方が、遥かに覿面で切実で可いだらう」――に託すことになる、作者漱石の津田への思いが投影されていると考えられる。

以上のことから、この詩は次のような津田に対する作者漱石の思いが詠われているといえよう。――世俗に生きる津田にあっては、彼の本来の心（第二の心）が、世俗に生きるための計算を旨とする意識（＝我執＝第一の心）によって制御されているために、「太平」な意識の状態にあったが、しかしその代償として彼の心には「飢え」が付きまとっている。この「飢え」は何かの機会があれば、津田の心の「太平」をぶち壊し、葛藤（＝「兵燹」）を引き起こさずにはおかない。彼の心の「飢え」は、彼本来の第二の意識（＝真の心＝仏性＝人間的意識）が、第一の意識（＝我執＝現実世界に生きるための計算高い世俗的意識）を克服することによってはじめておさまるのだ。――

この詩は、少年の手紙に接しても余り心を動かさず、また小林の真心からの忠告をも無視する津田の頑強な「我執」に対する漱石の批判という側面を持つ。この側面について言えば、この詩は作者漱石の津田への批判を詩のなかに封印し、作品『明暗』においては津田の「我執」をありのま

まに客体化して描き出すという手法を貫徹させる機能を持っているといえよう。一方、この詩のテーマは、フランス料理店の場面ばかりでなく、これから漱石が『明暗』の結末に向けて書くことになる津田の我執（第一の意識）の行方の見取り図ともかかわる。この詩は漱石がこれから書くであろう津田の我執の行方についての構想メモという性格を強く持っているのである。

＊　＊　＊

右に「悟りの契機」が詠われている詩における津田の意識との重なりを見てきた。前詩は津田が小林によって不遇の少年の手紙を読まされることによって、彼の内面にある我執とは異なるもう一つの意識が目覚めることに重なり、後詩は、津田の将来の姿が暗示的に詠われているといえよう。『明暗』は百八十八章で中絶しているために、作者漱石が津田にどのような結末を与えることになったかは定かではないが、この二首の絶句は、温泉場での津田と清子との対話の意味を明らかにし、また漱石が書いたであろう『明暗』の結末を暗示する構想メモとして存在しているのである。

おわりに

本稿では漱石が日課としての漢詩創作を中断するにあたって、その最後に位置する六首の五言絶句に、『明暗』（フランス料理店の場面）における構想メモとしての性格を付与していることをみてきた。『明暗』期における漢詩創作の意味は、作者が津田を中心とする登場人物の意識を描くにあたって、その醜悪さを、作者の批判的言辞によって彩ることなく、ありのままに客体化して描き出すという手法に徹するための作業という意味を持っている。本稿で取り上げた六首の絶句の内容もまた同様の機能を持つ。しかし同時にこれらの六首の絶句では、その寓託を通して、漱石がこれから書こうとするフランス料理店での小林と津田との会話の核心が詠われているのである。このような六首の五言絶句は、フランス料理店の場面で作者が描こうとする内容の先取りであり、構想メモとしての性格を持っているといえよう。この六首の五言絶句が持つ構想メモという性格は、漱石の『明暗』の創作意図を如実に示すものといえるのである。

注

（1）『明暗』各章の執筆日については、高木文雄「柳のある風景」（『漱石の命根』桜楓社昭和五十二年所収論文）及び、拙稿「『明暗』と漢詩の「自然」」（大阪経済大学「教養部紀要」十八号二〇〇〇年十二月）参照。また、岩波『漱石全集（第二十七巻）』所収の「年譜」によっても、八月十四日に八十九章を書き、その日から七言律詩を書き始めたことが確証できる。

（2）本稿に記す「語釈」や「大意」は、多くの先学の諸注釈を参照させていただいたが、私見とは異なる点も多い。その注記は煩雑となるので省略した。

（3）和田利男『漱石漢詩研究』人文書院・昭和十九年（奥付は昭和十二年）

（4）飯田利行『漱石詩集譯』国書刊行会・昭和五十一年

（5）小林の意識の特徴は、近代的思惟（社会主義的意識）と禅的思惟とが重なっている点にある。このことは禅的視点によって、小林の社会主義的意識の内実（その肯定面と否定面）が浮き彫りにされていることを意味する。

（6）この詩の「估客」には次の良寛詩の「人の買うなし」の影響が考えられる。しかし詩全体の内容は大きく異なる。

十字街頭一布袋　十字街頭　一布袋
放去拈来凡幾年　放去拈来　およそ幾年ぞ
無限風流無人買　無限の風流　人の買うなし
帰去来兮兜史天　帰りなんいざ　兜史天

（7）一海友義『漱石全集』第十八巻（漢詩文）岩波書店・一九九五年

（8）吉川幸次郎『漱石詩注』岩波新書・一九六七年

（9）漱石が描き出す、フランス料理店での小林の意識のありようの問題は、作者自身の理想の分裂――彼の目指す禅的な境位（大愚）からすれば、小林の制限であるが、しかし、社会や金との小林の格闘と、彼の社会的不合理への批判（＝禅の立場からすれば、現世に対する執着）には、共感せざるを得ないという、漱石の意識のうちにある理想の分裂――として存在しているものなのである。

（10）この詩は托鉢を詠った良寛詩「富貴はわが事にあらず……腹を満たさば志願足る。……一鉢到るところに携え布嚢また相宜し」という禅僧のイメージと繋がるものであろう。このことからも、この詩が「托鉢」をテーマとしていることは確実である。

（11）小村定吉『新訳漱石詩選』沖積舎・昭和五十七年。「君恩」とは托鉢を伝えた「仏恩」のこと推測されるが、その用例を管見の範囲では見つけえないので、今は小村氏の注に従う。後考を待つ。

（12）次に引く良寛詩との類似も考えられる。

城中乞食了　城中　食を乞いおわり
得々携嚢帰　得々として嚢を携えて帰る
帰来知何処　帰り来る　知らず　いずれのところぞ

家在白雲陲　家は白雲の陲（ほとり）に在り

（13）山田無文『碧巌録全提唱』第一則（本則の下語）・第六十六則（本則の評唱・頌の下語）などの解説。

（14）中村宏『漱石漢詩の世界』第一書房・昭和五十八年

（15）拙稿「『明暗』における清子の形象」（「大阪経大論集」（五二巻六号）二〇〇二年三月）

付記　本稿は阪神近代文学会（二〇〇二年七月十三日於神戸山手大学）での口頭発表の一部に加筆したものである。